

## CLC からしだね書店便り



12 2021  
December

CLCからしだね書店では…

- ① キリスト教書が中心ですが、福祉、心理、精神、哲学、児童書、その他一般の良書もたくさん揃えたいと思います。
- ② お洒落 でかわいい雑貨や小物もあります。
- ③ ブックカフェとして、ドリンクやスイーツ、ランチも提供しています。ゆっくり本を読みながら、お過ごしください。
- ④ コーヒーを飲みにきてくださるだけでもけっこうです。
- ⑤ 図書コーナーも併設予定です。ドリンクを片手に、好きな本を手にとってお読みください。
- ⑥ 古書の販売も準備中です。
- ⑦ 読書会や著者を招いての講演会など、人と人が出会い、つながる「対話」の場を提供します。

## 『跳びはねる思考』

著者 東田直樹  
角川文庫

みなさんは街で突然跳びはねたり、走りだしたり、しゃがみ込んで動かなくなり、周囲の促しや注意にも耳を貸さずにその行動を続ける、強制的にやめさせようとするとパニックを起こして手が付けられない。というような場面に遭遇したことや身近に経験されたことは無いでしょうか？

私がこの本を手にしたきっかけは、NHKのドキュメンタリーでした。『君が僕の子供について教えてくれたこと』というタイトルの番組では、重度の自閉症者である著者の日常を紹介すると共に、彼が書いた『自閉症の僕が跳びはねる理由』という本が、自閉症の子どもを持つ親や家族が彼の言葉を通して自分の子どもの行動の意味を理解しようとしたり、向き合うことを始めるいくつかのストーリーが紹介されていました。

会話が成立しないほど重度の自閉症である著者ではあるが、幼いころから文字に対して強い興味を示す様子を見た母親が、パソコンのキーボードによって文字を書くことを教え、一緒に練習し続けたことで、話すことでは自分の思いや気持ちを表現できない著者が、パソコンや文字盤を使ってその内面を表現する手段を手に入れたそうです。

自閉症に限らず、様々な障害や病気を理解できなかったり、そもそも知らなかったり接する機会を持たなかった人にとっては、奇異な行動に思えたり、変わった人、ちょっと怖い人などと感じてしまうのではないのでしょうか？

番組の中で自閉症の子を持つ親ですら、自分の子どもの行動が理解できず、子育てに絶望を感じたり、子どもに怒りを感じたり、子どもに対して苛立っている自分を責めたり、どうしていいかわからず悩む姿が紹介されています。

今回紹介する『跳びはねる思考』という本には、表面的には他者と上手くコミュニケーションを取れない著者の中に、これほど豊かな感情や人や社会に対する思いが秘められていることに驚かされると共に、自分自身が見える状態が全てであるかのように思い、その行動の意味や理由、動機を知ろうとしないまま、決め付けの中で自分の思考を動かし始めていることに気付かされ、はっとさせられました。

これは自閉症に限らず、知的障害、精神障害、発達障害、依存症、認知症などの障害や病気の人たちの行動や状態を見て、「言っても分からない」「理解できない」「感じていない」などと思いつき、決め付けた思考で止まってしまうている自分に気付かされますが、こちらの言っていることや状況は理解しているにもかかわらず、言葉や態度でその思いや感情を伝えることができない状態であったり、その人の中のコントロールが上手くできずに他者からは理解できない行動をしてしまったり、無反応は状態に置かれているのだと思われ知らされました。

そのような人たちを前にして「分からないから」「理解できないから」と、そこに居ないかのように無視したり、「奇異な存在」「怖い人」のような態度、扱いで接するとしたら、それはどれほどその人の「尊厳」を傷つけ続けていることなのか恐ろしくなります。

ネットの世界では様々なニュースや個人のおぼやきですら瞬時に世界を駆け巡ります。それに対しての賞賛や励ましのコメントもある一方で、誹謗中傷や断罪し排除するコメントも溢れています。情報にいと簡単にアクセスできる時代にあつて、声なき声に耳を傾けようとする気持ちや姿勢が大切であると共に、目に見える行動や状態だけではなく、その背景であつたり、理由や意味、意図があるのではないかという「引っ掛かり」を持ち、少しの「間」を持てる心のゆとりや寛容さが、私個人にも現代社会にも必要だと感じています。

身体障害や難病、妊産婦や高齢者、幼い子供、路上生活者、生活困窮者、ひとり親家庭、LGBTQと表現される性的マイノリティーや在留外国人など社会の少数派や自分が経験したことのない状態や人たちに対する自分自身の反応も、同じような姿勢から理解の扉が開いていくように感じます。多様性を認め合う社会の実現は、自分が知らないであろう人やその状態、理解できていない人のことやその背景を知ろうとすることからだと、この本は教えてくれているように思いました。

社会福祉法人ミッションからだね

精神保健福祉士 社会福祉士 鋼島 愛信



# 第12回：「暗い話」を聞きたくなかったヒカルくん

臨床心理士  
坂岡 大路

1988年京都府生まれ。北海道大学大学院教育学院臨床心理学講座修士課程修了。訪問型フリースクールや、児童デイサービスなどでのボランティア経験を経て、札幌市内の児童精神科に勤務。臨床心理士、公認心理師。2019～2021年『成長』(いのちのことは社)誌に「3人で学ぶ教会学校」を連載。

ヒカルくんは明るい性格の男子中学生です。人当たりよく、友達が多い彼は、何人かの同級生を教会につれてきていました。ヒカルくんがつれてきた友達の一人に、カツキちゃんという女の子がいます。カツキちゃんは、どちらかという不器用なタイプ。人間関係で失敗して落ち込むこともしばしばです。

当時教会学校のスタッフをしていた私は、教会を「安心してグチの言える場所にした」と考えていました。ですから、カツキちゃんが日ごろの辛さを話して、それをみんなで受け止められるのは、無条件に「いいことだ」と思っていたのです。

ところが、とある日の出来事は、そんな私の思いをひっくり返すものでした。

その日も、カツキちゃんが悩みを話し、また皆で聞く、という雰囲気になっていました。そのとき、ヒカルくんはこう言ったのです。

「そんな暗い話、」こでしなくていいじゃん。」

誤解のないように言っておくと、ヒカルくんは心配りのできる優しい子であり、むしろ「空気の読める」タイプです。この発言も決してきつい言い方ではありませんでした。ですが、「教会は弱さを抱えている子の居場所」と考えていた私は、思わずこう言ってしまいました。

「そいつう話をしたっていいんだよ。」

そのあとのやり取りは、いつものようにつつがなく進みました。そしてその日以来、ヒカルくんは教会に来なくなりました。

ヒカルくんはもともと教会に毎週来るタイプではありませんでしたし、この時のやりとりがすべての原因ではないかもしれませんが、他にもっとやりたいことができたのかもしれない。しかし、あの時の彼の言葉と、それに對して私が言ってしまった言葉は、いまだに小骨のように心にひっかかっているのです。

例えば、当時私が通っていた教会には、不思議と「何かしら事情のある」子が集まっていました。そんな中で、ヒカルくんのような存在は逆に珍しいものだったと言えます。素直で明るく、こちらの意図を察してくれる「いい子」。しかし、だからこそ、「大人に合わせる」ひっこめてしまった声、私が抑え込んでしまった声が、そこにはあったのではないかと、今はそう思います。

今の私ならどんな風に声をかけるだろう、と想像してみます。「あーヒカルくんは今、あんまり沈んだ話をしたくない感じなのね」と、汲み取ってみるか。それとも、「みんなで気軽にグチり合える空気が、ぼくは嫌いじゃないんだけど、そうか、きつい人もいるか…。それも正直な感想だよ。どうしたもんかねえ。」こんな風に、独り言っぽく場に投げてみるか。もう後の祭りですが…。

つまり、こういう矛盾があるのです。「弱さを抱えた人の声を聴く」というのが私のモットーですが、「(今は)聞きたくない」という人だっている。それを抑え込むことは、逆の意味での抑圧になります。「聞きたくない」という人の弱さを、また別の「正義」に「話を聞くべき」という「べき論」で抑え込んでいることになる。

例えば、これは結構普遍的な構造かもしれませんが、たとえば、「人権」の問題が典型例です。「人権を守るべき」という主張に反論できる人はなかなかいませんが、「人権」を押しつけられたように感じて、怖くなったり、言いたいことが言えなくなる人もいます。そして、心の奥底では、「人権なんてきれいごとだ。結局、『強い』(と世間に思われている側の)私が我慢させられるばかりじゃないか。何が平等だ…」と、こんなしりを残してしまっ。これは悲しいことです。

「人権」の哲学者・金泰明は、著書で次のような趣旨のことを述べています(『共生社会のための二つの人権論』)。人間はだれでも自己愛を持つ。それは自然なことである。なのに、自分の欲望や自己愛と無関係に「人権、人権」と言われても、それはどうしても暑苦しく、よそよそしく、押しつけがましく響いてしまっ。大事なことは、欲望を罪悪視したり、禁欲を強いることではない。むしろ、人間はだれでも自分が大事(自己中心的)なのだということを前提に考えたほうがよい。「だれもが自分を大事にしている」ということ。まずここから、対話を始めよう。自分の感性、自分の感じ方、自分の想いを否定しない。あえて「自己中心性」から始める人権論。それが、金の主張です。



そして私の番になりました。それまでの様子から、順番的に私に来るのは予想できました。それとなく彼の表情を見ていましたが、彼はとっても楽しそうに、いつもの満面の笑顔でした。内容こそ理解できないのですが、最後の「ありがとうございまーす」によって、私の恐怖感は消されていました。いざ、彼に目の前に立たれてみると、何度聞いてもわからない演説、そして最後の（人の笑いを取ろうとしているとしか思えないような）「ありがとうございまーす！」にこらえきれずに噴き出してしまいました。あからさまに噴き出すことは想定外で、そんな自分にどうしたらいいのかわからなくなって、「ありがとうございまーす」と無意識に応答してしまいました。

彼はそんな私を無視して、隣の学生らしき男性のところへ移動し、「ありがとうございまーす」を続けました。が、その学生さんが、「えー……っ！僕っ！あ、ありがとうございまーす」と返答したのです。そしたら、車内でこらえきれなくなった数名の人の笑い声が聞こえてきました。その隣の女性も、「ありがとうございまーす」と続き、彼がいつもの駅で降りるまで、彼と乗客との「ありがとうございまーす」が続きました。

## 特別嚴重警戒の中で

それから半年以上たちました。

しばらく彼の姿を見ることがなく、私の日常からも彼はすっかり消えていました。が、先日、久しぶりに彼が戻ってきました。

上下が逆の紙面（その時はマンションの広告）を声に出して読み上げながら、相変わらずご機嫌さんで、乗り込んで来ました。そして、私の隣にドカッと座りました。彼に続いて、重々しい足取りで、がっしりした体格の駅員さんが彼の目の前で仁王立ちになりました。その駅員さんの胸にはゼッケンのようなもので「特別嚴重警戒中」と書いてありました。明らかに、彼をその「対象者」として警戒しているのがわかりました。

車内には、そのゼッケンの駅員さんによって、ちょっとした緊張感のようなものが漂いました。

彼はというと、自分を「危険人物」として警戒している、目の前に立っている駅員さんには全く気付かず、相変わらず大きな声で一人語りをしています。

彼の真横に座る私は、そのあまりにもコントラストに目が離せなくなりました。他の乗客もスマホから目を離し、駅員さんのゼッケンと、ご機嫌さんで何かを言っている彼に見入っている様子でした。

そして、その時が来ました。

広告を読み終えたのか、降りる駅が近づいたのか、彼はすっと目をあげ、目の前の物々しい「特別嚴重警戒中」の駅員さんに気づきました。そして、

「Oh! Oh my god! Oh my god! Oh my god!」

満面の笑顔で、チャップリンのまゆげをひょこひょこ持ち上げて、楽しそうに繰り返しました。そして、次に、隣にいる私にも同じように

「Oh my god! Oh my god! Oh my god!」

を始めたのです。

私は、ポーカーフェイスにも限界が来て（マスク越しではありませんが）、「ぶわっはっはっは〜」と笑ってしまいました。噴き出した私を横目に彼はすくっと立ち上がり、駅員さんを後ろに引き連れて、マーチングの足踏みで降りて行きました。これにも、「ぶわっはっはっは〜」となりました。その時、周辺の乗客の、マスク越しに見える複数の目は、確かに「笑い」であふれていました。

## 個人的に会った

この時、私に浮かんでいたある言葉があります。それは、「個人的に会った」ということです。からしだね書店だより11月号で、臨床心理士の坂岡大路さんの文章の中に「違いが険悪なものにならず、受け止められるもの変わるためには、何が必要なのか。その答えの一つこそ、語り合い、聴き合う関係の中で、『個人的な理由』が見えてくること、だと思えます。表面的な意見の奥にある、その人のパーソナルな『顔』が見えることです。」とありました。この文章を読んでから、目の前の出来事や人との関係の中で、「個人的な理由」や、表面的なものの奥にある「パーソナルな顔」に出会うことについて考えるようになりました。

この山科のチャップリンの出来事の中で、車両に乗り込んだ彼を「問題」ととらえた人がいる中で、私はどうして「不安」や「恐怖」を感じなかったんだろう……。その答えは、彼と「個人的に出会っていた」ことにあるように思うのです。目の前には存在



# 献本についてのお知らせ

たいへん申し訳ございませんが、  
送料をご負担いただけると  
ありがとうございます。  
(受付できないものもありますので  
事前にお知らせください)

## 【献本をお願いしたい本の種類】

- 1 キリスト教書、キリスト教に関連した本（多少、書き込み等があっても、大丈夫です）
- 2 哲学、心理学等、人の生き方に関する本
- 3 社会の中で起きている問題を扱った本
- 4 暮らし（料理、健康、経済等）にかかわる本
- 5 小説（人の暮らし、尊敬、生き方を表現したものであればジャンルを問いません）
- 6 漫画（人の暮らし、尊敬、生き方を表現したものであればジャンルを問いません）

## 【本の送り先】

住所：〒607-8216 京都市山科区勤修寺東出町75 からしだね館

宛先：CLC からしだね書店 献本係 電話：075-574-1001 FAX075-574-0025

Mail：clc@karashidane.or.jp

## 【本と一緒にいただきたいもの】

以下の内容を記入したメモ

①献本者のお名前②ご住所③電話番号④メールアドレス⑤さしつかえなければ、献本者の簡単なプロフィール、献本いただいた本の感想や思い出等を一言。⑥献本くださった方のお名前を書店だよりにご紹介させていただきたいと思えます。お名前の掲載は困るという方は、お知らせください。

【古本の売上を含むCLCからしだね書店の収益は、すべて、書店で働く障がい者の工賃になります】

## 【献本感謝】

杉野マリ子様、山田昌昭様、深谷純一様、勝藤美代子様、ロゴス社様、岸川萌木様、兼松哲夫様、竹下八千代様、東近江キリスト教会様、入江治美様・尚志様、関美佐子様、中村直美様・前田三喜雄様、坂本正路様、上羽佳代子様、大兼久芳規様、青木秀次様、近藤栄恵様、貝出久美子様、よつ葉ホームデパルター京滋様、岩田和子様、福井文彦様、前川洲子様、入江治美様・尚志様

## 編集後記

◆コロナが少し落ち着いた11月後半ころから、ご来店者も増え、教会のお友達どうし、カフェでゆっくりくつろいでくださる方も増え、うれしいばかりです。少しずつ、からしだね書店のことが認知されつつあるのかと思います。◆右も左もわからないものが、しかもこのコロナ禍の最中に、キリスト教書店を引き継ぎ、1年間、なんとかやってくることができました。失敗もたくさんあり、特に最初のころは、いろいろな点で、お客様にご迷惑をおかけすることばかりでした。ここにあらためてお詫び申し上げます。それでも、今こうして山科の地にキリスト教書店が存在し続けていることの意味は大いだと思います。これも、多くの皆様のご協力とご支援とご指導と、そして祈りがあったからです。本当にありがとうございます。皆様のうえに、神様の豊かな御守りと祝福がごきますように。どうぞ新しい年も、よろしく願いいたします。

編集・発行：社会福祉法人ミッションからしだね  
就労継続支援A・B型事業所からしだねワークス  
からしだね書店&カフェ・トライアングル

〒607-8216 京都市山科区勤修寺東出町75 からしだね館  
書店電話番号 075-574-1001 FAX 075-574-0025  
書店メール clc@karashidane.or.jp

CLCからしだね書店だよりの  
バックナンバーはこちらから

